

マルコ・ポーロ『世界の記述』における 「ジパング」

片山 幹生

1. 序

日本では『東方見聞録』^①というタイトルで知られているマルコ・ポーロ Marco Poloの『世界の記述』^②は、西洋世界に日本の存在を伝えた最初の文献である。本論では、十三世紀末に書かれたこのあまりに有名な「旅行記」の日本に関する記述を、中世の知的伝統の中で蓄積された東洋のイメージと照らし合わせて読解することで、マルコ・ポーロの記述の戦略的性格とその語りの機能について検討する。

本論に入る前にまず簡単にこのテキストの成立について確認しておこう。『世界の記述』の序文によると、マルコ・ポーロは1271年後半に父と伯父とともに旅立ち、1295年にベネチアに帰国している。『世界の記述』はマルコの帰国後間もなく、十三世紀末に口述筆記された。他の大半の中世の作品同様、『世界の記述』もマルコ・ポーロあるいは作品の口述筆記者であるとされるルスティケッコ・ダ・ピーサ Rustichello da Pisaの手による手写本は残っていない。十四世紀初頭に制作されたイタリア語がかったフランス語で書かれたF写本 (Paris, BnF fr. 1116) がオリジナルのテキストに最も近いテキストを提供していると考えられている。ポーロのこの作品は十四世紀中にラテン語をはじめとする各国語に訳され、この作品を記録する写本は140以上確認されている。このうちフランス語の写本は、断片だけのものを含め、18写本が現存している。フランス語写本のうち最も古いものは十四世紀前半に制作され、この写本の祖本はF写本と同じものであると考えられている。

フランス語写本を底本とするエディションのうち、十四世紀前半に制作され

たB1写本（Londres, BL Royal 19 D.1）に基づくフィリップ・メナールのエディションが今後フランス語版の『世界の記述』の決定版となることは確かだが、現在全六巻のうち三巻目までしか刊行されていない⁶⁾。このため本論ではバデルが校訂したB4写本（Paris, BnF fr. 5469）に基づくLivre de poche版を引用の際の典拠とした⁶⁾。B4写本は十五世紀半ばの写本で同系統の写本の中では最も完全な記述のテキストを提供している。

II. 史実から伝説へ：「ジパング」の記述の背景

日本（＝ジパング）についての記述はバデルのエディションでは、158、159、160⁶⁾の三章に渡っている。ただし160章の見出しは、この版では「カタイとマンジの偶像崇拝のやり方についてここで語る」となっていて「ジパング（このテキストではフランス語読みでシパンギユSypangu）」は見出しの中に含まれていない。しかし各章の見出しは写本によって異同が多く、160章の内容を読めば、この章が日本を含む東・南シナ海の広大な海域に散らばる島々の風俗の描写に充てられていることは明らかである。

日本に関する三章はインドとその周辺地域を扱う部分の最初におかれている。この部分ではポーロが帰国の際に採った、中国からインドを経てペルシャに至る海上ルート上の国と地域の描写に充てられている。

『世界の記述』冒頭で、この書物にはポーロ自身が見た物事だけでなく、他人からの伝聞情報も記述されていることが記されている⁶⁾。ポーロが日本に行っていないことは160章で明示されており⁶⁾、したがって『世界の記述』の日本についての記述は専ら伝聞によるものである。

この三章において「シパンギユ」がどのように書かれているかについて確認しておこう。他の多くの地域の記述同様、マルコ・ポーロは地理、民族、宗教についての簡潔な描写から始める。

Sypangu si est une isle en levant qui est en la haulte mer loing de terre ferme .M. et .VC. milles et si est moult grant isle. Et les gens sont blans et de moult belle maniere. Ilz sont ydres et se tiennent par eulz. (Éd. Badel, p. 378).

シバンギユは東方の海上にある孤島で、大陸からは1500海里の距離にあります。シバンギユは極めて巨大な島です。住民の肌は白く、美しい姿形をしています。シバンギユ島民は偶像崇拜教徒で、住民自らによって島を統治しております。

1500海里の距離（約2500km）は、モンゴル軍が上陸を試みた九州北部と、当時の中国の国際貿易港でインド航路への基点となったサイトン（泉州）との距離にほぼ相当する。泉州はポーロがインドに向けて旅立った町でもあった。ただし当時の日中貿易の中国の拠点、泉州から北に600キロのところにある杭州に限られていた。元寇の際にモンゴル軍が日本に向けて出港したのも杭州である⁽⁸⁾。1500海里という距離が、泉州と九州北部間の距離と符号するという事実は、ポーロが日本についての情報を泉州滞在中に収集したことを示唆している。この推定は「ジバング」という呼称が、当時の中国南部方言での日本国(ji-pen-quo)の発音に由来していると考えられることとも符号する。マルコ・ポーロが『世界の記述』で使っているサイトンという泉州の名称はこの町を貿易活動の拠点としたイスラム商人の間で主に使われていた呼称であることから、ポーロは日本についての情報をイスラム商人から得ていた可能性が高い。

引き続いてマルコ・ポーロはこの島の豊かさについて語り始める。ジバング黄金伝説の始まりである。

Et si vous dy que il ont tant d'or que c'est sans nombre, [...] nul n'en oseroit oster n'emporter or de l'isle, pour ce que pou de marchans de terre ferme si vont la pour ce que elle est si loing; si que pour ce ont il tant d'or a desmesure que il n'en scevent que faire. [...] Sachiez que il a ung moult grant palaiz et tout couvert d'or fin en la maniere que l'en souloit couvrir noz eglises de plonc.[...] Et plus encores, car tout le pavement du dit palaiz et de toutes les chambres d'icellui sont pavees de fin or tout de grosses tables et grans, et ont bien .II. doz d'espesse. [...] Ilz ont grant planté de pierres et si ont perles qui sont rouges et sont moult belles et de grant vaillance et qui bien valent autant comme les blanches. [...] (*Ibid.*, p. 378).

そして量ることができないほど大量の金をこの島の住民は持っていることを言っておきます。[...] これまでこの島から金を持ち出そうとするものはいませんでした。というのも大陸から遠く離れた場所にあったため、この島に行った大陸の商人はほとんどいなかったからです。[...] この島には非常に大きな宮殿があり、その

宮殿は、我々の国の教会が鉛で覆われているようなやり方で、純金で覆われていることを、お知りおき下さい。[...] それだけではありません。この宮殿の床とあらゆる部屋は大きな純金の板でできていて、その金の厚さ是指二本分ほどもあるのです。[...] 島の住民は宝石を大量に持っていますし、真珠もたくさん持っています。赤い真珠で非常に貴重で、その価値は白い真珠に匹敵します。

これらの黄金と富に関する記述の内容は明らかに誇張されたものである。十三世紀末当時において日本が世界有数の金産国であったという事実はない。この日本の黄金伝説のソースとして、遣隋使以降日本の中国使節はその滞在費用として砂金を持ってきたこと、中尊寺の金色堂の様子が誇張されて中国に伝わったこと、当時の日中貿易で日本は中国に対して大幅な赤字の状態だったので代金の支払いのため日本から中国にほぼ一方的に砂金や水銀の流入があったこと等の歴史的事実を挙げ、これらを核に日本の黄金伝説が形成されたのではないかという仮説も提示されている⁹⁾。

またイスラム世界では九世紀以来「ワクワク」と呼ばれる黄金の国の伝説が流布していた。「ワクワク」は、日本を示す中国語の名称、「Wa-quo (倭国)」に由来すると考えられている。ポーロがおそらく日本に関する情報の大半を収集した大貿易港、泉州は当時のイスラム商人の貿易基地でもあった。『世界の記述』の黄金伝説は、中国・イスラム商人の想像力によって作り上げられた日本の黄金幻想を反映したものである可能性が高い。

黄金伝説に引き続き、モンゴル軍の日本への侵攻の様子が描写される。モンゴルは1274年の文永の役、1281年の弘安の役の二回に渡って日本を侵攻しているが、ポーロのここでの記述はその内容から二回目の遠征、弘安の役について書かれたものだと考えられている¹⁰⁾。『世界の記述』158章に記されている逸話、モンゴル軍兵士が九州沖合の島に置き去りにされたことは、元の史料でも日本の史料でも確認できる。

第159章でも引き続きモンゴル軍と日本軍の戦いについての描写が続く。この章では、小島に置き去りにされたモンゴル兵の日本の首都攻略の様子、首都の攻防戦とモンゴル軍の降伏、戦いから逃げた将軍の処刑、日本の兵士が持っていた奇跡の力を持つ石の逸話が語られている。史実とほぼ矛盾しない前章の

記述とは異なり、159章で語られる逸話はほとんどすべて対応する史実のないロマネスクな内容である。

160章はジバング島とその周辺の島々の宗教と風俗について割かれている。

Or sachiez que les ydres du Catay et du Manzi et celles des isles d'Ynde sont toutes d'une maniere. Et si y a tel ydre qui a chief de buef et tel qui a chief de porc et telle de chien et telle de mouton et de plusieurs autres façons. Et si en y a aussi de si faites qui ont unes testes a .IIII. chieres, ete telle qui a .IIII. chiefz : l'un tel comme il doit et les .II. sus chascune espaulle. Et si en y a de telles qui ont .IIII. mains et telles qui en ont .X. et telles .M., maiz a celles de .M. ont il le plus grant fiance que aux autres. (*Ibid.*, p.384, 386).

さてお知りおきください、カタイ（中国北部）、マンジ（中国南部）およびインドの島々で崇拜されている偶像はみな同じ外観を持っています。頭部が牛である偶像神や、頭部が豚、犬、羊あるいは別の動物をかたどったものもごぞいます。それに頭部に四つの顔を持つ神像や、本来あるべき頭に加え、両肩に二つの頭を乗せた三つの頭を持つ神像もあるのです。さらに四本の腕を持つものもあれば、十本あるいは千本の腕を持つ神像もありますが、千本の腕を持つ神像は他の像よりもさらに熱心に信仰されておりす。

ポーロはまずこれらの地域で信仰の対象となっている仏像のグロテスクな形態の説明から始めている。他の箇所同様、ポーロは仏教もしくはラマ教を「偶像崇拜」の宗教と呼ぶ。ここでの描写は千手観音や多面観音像を想起させるが、牛や豚や馬の頭部を持つ動物神の描写は仏像よりむしろ当時のインドネシア諸島でも信仰されていたヒンズー教の神像を連想させる。

宗教の説明が終わると、ポーロはこれらの島々で行われている人肉食（カニバリズム）の報告を行う。

Maiz tant vous en diray que, se il avient que ceulx de ceste isle et de toutes les autres prennent aucun leur anemi et il ne se puet racheter de monnoie, si [semondra] celui qui aura l'omme pris tous ses parens et ses amis et prennent cel homme et l'occient et le cuisent et le menguent a grant feste et font la meilleur char du monde la char de l'homme. (*Ibid.*, p.386).

ただ私がしっかりとっておきたいのは次のことです。この島あるいは他の島々の人々は皆、捕まえた敵の身代金が払われない場合、敵を捕らえた者は親類や友人を呼び集めると、みんなで敵を取り押さえ、殺して、料理した後で、大きな宴会を開

いてそれを食べてしまうのです。彼らにとって人肉はこの世で一番のご馳走なのです。

人肉食の風習の紹介のあと、マルコ・ポーロは「シナ海」（この名称で彼が示す海域は、実際のところ、彼が考えているよりはるかに広大な北太平洋一帯である）の産物について列挙し、この章を終える。以上がマルコ・ポーロの『世界の記述』の中の「ジパング」記述の概要である。

III. 「真実」と「虚構」：東洋記述にみられる語りの戦略

これらの「ジパング」についての記述を、西洋中世の東洋表象の伝統に照らした上で検討してみよう。

まず日本の黄金伝説だが、このソースについては愛宕氏を始めとする東洋史学者が指摘しているように、いくつかの歴史的事実を核に形成されてきた可能性を否定することはできない。しかし実際のところ、マルコ・ポーロの描く日本の富の描写は、中世ヨーロッパで書かれてきた物語、百科事典的著作の中に繰り返し出てくる東洋の豊かさというトポスをなぞっているに過ぎないとも言える。十字軍遠征を背景に十二世紀後半に偽造され、その後のヨーロッパ人によるアジアのイメージ形成に重大な影響あたえた『司祭ヨハネスの手紙』にある司祭の国の宝石の豊かさの描写と、マルコ・ポーロのジパングの黄金の描写の間には本質的な違いはない⁽¹²⁾。「豊かさ」の列挙は東洋を表象するトポスとして多くの中世の作品でなじみの記述であり、ポーロの『世界の記述』の中でもジパングに限らず、このような「富」の描写は、大カーンの都をはじめ、至るところで繰り返されているのである。

ポーロが160章で報告している人肉食の習慣も、東洋世界の描写の付随する慣習的記号の一つに過ぎない。『世界の記述』では、160章以外にも、四ヶ所でポーロは人肉食について報告している⁽¹³⁾。

十三世紀後半に書かれたブルネット・ラティーニ Brunetto Latiniの百科事典、『宝典』のインドに関する章では、東方世界への富の描写につづいて、人肉食の描写がみられ、されにはアジアに住む怪物の姿が描写されている。

Hors de Inde sont .ij. isles, Erile et Argite ; où il a si très grant chose de metal, qui li plusor cuident que toute la terre soit or et argent.

Et sachiez que en Ynde et en celui pais là outre, a maintes diversitez de genz ; car il i a tels qui ne vivent que de poisons, et tiels i a qui ocient lor peres avant que il dechieient par viellesce ou par maladie ; et si les manjuent, et ce est entre euls une chose de grant pité. Cil qui habitent au mont Niles ont les piez retors, ce est la plante desus, et ont en chascun pié .vij. doiz. Autre i a qui ont teste de chien, et li plusor n'ont chief ; mais lor oilz sont en lor espauls. Unes autres gens i a qui maintenant qu'il naissent, lor chevol deviennent chenu et blanc, et en lor viellesce nercissent. Li autre n'ont que .i. oil et une jumbe, et corrent trop durement. Et si i a femes qui portent enfanz à .v. anz, mais ne vivent outre l'aage de .vij. anz. Tos les arbres qui naissent en Ynde ne sont onques sanz fuelles⁽¹⁴⁾.

インドの外側には二つの島があります。エリル島とアルジット島です。これらの島には巨大な鉱床があり、地面全体が金銀でできていると考える人もいます。

そして御知りおきください、インドおよびその外側の国には、極めて多様な人種が存在するのです。魚だけを食べて生きている人種や、老齢や病気で死んでしまう前に父親を殺し、さらにはそれを食べてしまう人種もいます。これが彼らにとっては大きな哀悼を示すやり方なのです。ナイル川上流に住む人種には足が逆の向きについている、つまり足の裏が上にあって、その指が八本ある人種も住んでいます。また犬の頭を持つ人種や頭がない人種もいます。頭がない人種の場合、その目は両肩についているのです。別の人種は一つ目の一本足で、走るのにたいそう難儀します。八年を越える寿命はないのに、五年の間、身ごもる女もいます。インドに生えている木には葉が生えていません。

上記引用にあるラティーニのインドの記述は、古代のプリニウス以来の東方世界の記述の伝統に由来する。こうした幻想的東洋世界のイメージは中世の百科事典的著作だけでなく、実際に東洋を訪れたポーロの記述にも大きな影響を与えている。さらには十四世紀後半に既存の書物の記述をつぎはぎして架空の東方旅行記を記したマンデヴィル Mandevilleの著作では、古代以来の東方に関する幻想的な民族誌的知識はさらに増幅されている⁽¹⁵⁾。

結局のところ当時の西洋世界の人間にとって、人間が住むのはキリスト教圏だけであり、それ以外の世界には、人間とは見なしがたい異教徒や、犬頭人、一つ目巨人、頭がなく目が胸についた怪物などが群棲していることになってい

たのである。こうした東方についての幻想的イメージは中世だけでなく、その後の時代にも引き継がれる。アメリカ大陸を発見したコロンブスもまたこうした幻想的な東洋のイメージとは無縁でなかった。つまり、大航海時代の人間の多くは、自分で直接見聞した範囲内の土地には人間が住むことを確認したけれども、それ以外の土地には化け物の住む可能性を信じ続けたのである。

中世の西洋人が東方世界に対して抱いた最初の幻想は、豊かな富あふれる世界である。司祭ヨハネスの手紙の中にある、インドにある彼の王国の豊かさの詳細な描写は、こうした伝統的な東方世界のイメージの典型例を示している。そしてさらに東洋は西洋世界と異なる風俗・生活習慣を持つ人々が住まう世界として描かれた。西洋のキリスト教会のモラルとは無縁である東洋は野蛮な奇習の土地でもあった。数ある中世の東方世界記述の中でも（中世に限ったことではないが）、頻繁に報告されるのは食人の風習と性に関する風俗（それもフリー・セックスに関わる幻想）である。ポーロのテキストでも中国辺境の三つの地方で、旅人に妻や娘を家の主人が供する性風俗が記録されている⁽¹⁶⁾。

こうした東洋にかかわる幻想的記述のステレオタイプは、当時の西洋世界にとってどういう意味・機能を持っていたのだろうか。

中世の西洋人にとって、「富」と「グロテスク」は東洋世界の描写に不可欠な記号だった。こうした記号的描写によってもたらされる類型的なエキゾティスムこそ、当時のヨーロッパ人にとって東方世界の「現実性」*réalité*を感じさせるものだったのである。

十三世紀後半から十四世紀前半にかけての強大なモンゴル帝国の成立によってユーラシア大陸に「モンゴルの平和」*Pax Mongoriana*が到来し、古代以来途絶えていた東西交通が復活した。この期間にモンゴルを訪れた教会人や商人によって、彼らが自分の目で観察した東方世界の報告が数編書き残されている。しかし彼らの観察眼は、古代以来のリブレスクな知的伝統から完全に逃れることはできず、彼らの東方記述は例外なく真と偽、可能と不可能、現実と幻想が同じ次元でいりまじったものになっている。ポーロの『世界の記述』も同様である。この種の幻想的な「驚異」は、東方世界の報告を真実らしくするためには不可欠なものとなっていたのである。当然東方世界の探検者はこうした驚異に関する情報には敏感であったに違いない。

商人であったマルコ・ポーロは極めて冷静な東方世界の観察者ではあったが、中世の伝統の中で形作られてきた幻想的な東洋のイメージから完全に自由だったわけではない。極東の島国「ジパング」のような彼が実際に訪問したわけではない辺境の地域は、こうした東洋に関する古典的な驚異を配置するにはふさわしい場所だったに違いない。

一世紀の大プリニウスの『博物誌』以来、七世紀のセビリアのイシドルスの『語源』を経て、十三世紀のボーヴェのヴァンサンの『世界の鏡』、ブルネット・ラティーニの『宝典』などに至る百科全書的な知の伝統の中で、東洋に関する知識は中世を通じて継承・蓄積されてきた。十二世紀後半以降に相次いで書かれた百科事典的著作では、東方世界に関する記述が増大する傾向にあるのは示唆的である。十三世紀はじめのピエール・ド・ボーヴェの『世界図』は、ホノリウスの著作の翻訳であるが、東洋に関する章は、ソリヌスなど他の著作からも情報を補足することで、ホノリウスの原著より詳細なものになっている。ブルネット・ラティーニの『宝典』の第一の書の第四部は「世界図」に当てられているが、その大半はアジアの描写で占められている。

実際のところ、ポーロの『世界の記述』はその日本語訳タイトルである『東方見聞録』が連想させるような「旅行記」ではない。「序文」の部分を除いて、ポーロ自身のことが語られるのはほんのわずかな場所にすぎず、それもただ単に報告されている事柄の証言者であることを強調する役割でしかない。この著作の本質的性格は、「旅行記」というよりはむしろ、大プリニウスの『博物誌』以来続く中世の百科事典的伝統の延長線上にあるものなのである。

こうした西洋のリプレスクな知的伝統の中でイメージされた東洋は、基本的には地理的な実体ではなく、歴史的・文化的な概念であり、象徴である。「オリエント」は西洋のアイデンティティ確立のための対概念に過ぎない。西洋の世界の対概念としての東洋に関する記述が十二世紀以降、特に充実してきた事実は、この時期の西洋社会の政治・経済面での急速な発展、知的成熟、十字軍などによるイスラム世界との軍事的接触などを挙げることで説明できるだろう。

ヨーロッパは、異文化＝他者を「東洋」として意識化することで「西洋」を規定した。十二世紀以降の東洋世界像の再構築は、ヨーロッパの知的自我の確

立の一プロセスをなしていたのである。この目的がゆえ、東洋世界は西洋世界にはない驚異の数々を持っていなければならなかったし、ヨーロッパ世界とは異なる世界でなければならなかったのである。

こうした観点から考えると、マルコ・ポーロの『世界の記述』の文体は興味深い。彼の「乾いた」素っ気ない文体は、旅行記というよりはむしろ地誌を我々に連想させるが、こうした「乾いた」文体の選択は、東方世界がマルコや同時代の読者にとって、外側から観察される対象であることを示唆しているように思えるからである。私がこの「旅行記」を読んで奇妙に感じるのは、ポーロは十七年間の長きにわたって中国に滞在したのにも関わらず、記述の中では彼は常に観察者でとどまっていることである。

この著作の序文では、『世界の記述』はマルコ自身が語ったものを、別人が口述筆記したものであることが明らかにされている。

[...] le quel livre puis demourant en la carsere de Genes fist retraire par ordre par mesire Rusta, Pysan, qui en celle meisme prison estoit au temps que il couroit de Crist mil .CC. IIIIXX. et .XVIII. ans de l'incarnacion. (Ed., Badel, p. 50).

この本は、ポーロ氏はジェノバの牢獄に投獄されていたおりに、ルスティケッロ・ダ・ピーサ氏に理路整然とした形で書き取らせられたものです。ルスティケッロ氏もまたキリストの託身から1298年目の年に、ポーロ氏と同じ牢獄に投獄されていたのでした。

ポーロが口述したとき、東洋の描写のための約束事はすでに確立していた。ポーロの口述筆記者であるルスティケッロ・ダ・ピーサは、作品の文体選択、構成についてかなり積極的なかたちで関与していたと私は考えている。散文アーサー王物語群の編纂の経験もある職業作家だったルスティケッロ・ダ・ピーサは、単なる口述筆記者ではなかったはずだ。おそらく職業的著述家であったルスティケッロが時代の聴衆の要求に応えるべく、伝統に則ったかたちで、ポーロの話を再構成したのだ。

マルコ・ポーロの『世界の記述』は極めて実証的で冷静な観察に基づく報告をたくさん含んでいるが、その記述の本質は中世の文学伝統の中で蓄積された東方の描写から遠い位置にあるわけではない。しかし数多く含まれる幻想的で

不正確な記述にもかかわらず、いやむしろそうした驚異についての記述が含まれているからこそ、ポーロの日本についての記述は、当時期待されていたその文学的機能を完全に果たすことができたのである。

IV. 東方幻想の継承とその実現

ジャン＝ポール・ルーは著作の中で「ヨーロッパ中で読まれたマルコ・ポーロのジバングについての記述は、彼の中国についての記述以上に人々を熱狂させた⁽¹⁷⁾」と記している。またテキストの校訂者であるバデルはその序文で、コロンブスはラテン語版の『世界の記述』の熱心な読者であり、中国とジバングについての記述に想像を膨らませたことが彼の「アメリカ発見」につながったと記している⁽¹⁸⁾。

ジバングの「黄金伝説」はおそらく十八世紀になってもまだ存続していた。トレブーの百科辞典の日本についての項目には以下のような興味深い記述が含まれている。

Mais ce qui les rend plus considérables, ce sont les mines d'or et d'argent. On y trouve aussi quantité de grosses perles, qui sont rouges, et aussi estimées que les blanches. (*Dic. Trévoux*, art. « Japon »).

しかし日本諸島でもっとも重要なのは、金と銀の鉱山である。さらに大きな真珠もここで大量に産出される。日本の真珠は赤い色をしており、白い真珠と同じくらい珍重されている。

金銀の鉱山のみならず、赤い真珠にまでこの項目は言及している。トレブーはこの項目を書くにあたってあたかもポーロの記述を参照したかのようである。

東洋の富に関する記述は伝統的でありふれた文学的トポスに過ぎない。それではなぜ日本の黄金伝説が特に彼らの関心をひいたのだろうか。

それはおそらく日本が東アジアの辺境にあるという地理的条件ゆえである。この地理的条件ゆえ、ジバングの伝説はヨーロッパ人をかくも魅了し続けるこ

とができたのだ。日本が発見されるのは1543年、マルコ・ポーロの著作が世に出てからおよそ250年後の話である。ジパングの黄金伝説は中世の西欧世界の想像力が生み出した東洋にまつわるありふれた神話の一つにすぎない。しかしこの神話はヨーロッパに対する日本の地理的条件によって東方世界についての他の類似記述より大きなリアリティを有するようになり、それゆえ大航海時代における新世界発見のモチベーションのひとつとなりえたのである。

新世界およびアジア、アフリカの土地が「発見」される過程で、ヨーロッパがアジアに対する軍事的・知的優越を認識したとき、中世以来の東方世界についての幻想的な民族誌的知識の集積は、ヨーロッパによる他方の世界の支配、東方の未開人への差別的処遇を「科学的」あるいは「倫理的」に正当化する役割を果たしたに違いない。そうした知識の源泉となった百科全書的著作やマルコ・ポーロの『世界の記述』のような地誌的旅行記の記述は、現代のわれわれから見ると荒唐無稽な記述が含まれているにせよ、当時の西欧世界の人間にとっては古代以来の知的伝統に基づく正統的な「学問」的著述であるとみなされていたからである。

ヨーロッパ人はアメリカ大陸を発見し、そこで中世以来の百科事典等に描かれた「怪物」と遭遇し、彼らをインディアンと呼んだ。そしてヨーロッパ人は莫大な金銀の鉱山もその土地で発見するのである。表現上の誇張はあるにせよ、十六世紀のスペイン司教のラス・カサスが告発するようなインディオに対する数々の残虐な行為⁽¹⁹⁾、あるいはアフリカの黒人奴隷の悲劇は、古代・中世以来の知的伝統によって形成されてきた「キリスト教圏ヨーロッパ対その他の世界」という歪んだ二項対立の世界観によって正当化される余地があったからこそ可能だったのではないだろうか。つまり西欧の人々の間には、非キリスト教圏の世界に住む人間たちを、「良き未開人」*bon sauvage*という肯定的神話のもとでとらえられるような観方もあった一方、古代以来の幻想的な東方地誌学に基づき「怪物」の類いであるという観方も広く受け入れられていたように思える。そしてサイードの『オリエンタリズム』以降のポスト・コロニアル研究の流れの中で強調されているように、この二項対立の世界観は十六世紀以降も現代に至るまで、より潜在的で根強いかたちでわれわれと関わりを持ち続けている。

ヨーロッパは新大陸だけでなく、アフリカとアジアにも、植民地を獲得し、

近代以降の西洋の繁栄はこれらの植民地をもとに築かれた。東洋の富に関する神話はすでに想像上のものではなくなった。東洋の富に関する神話はその後の歴史で、西洋による東洋の搾取という形で実現していったのである。

もしポーロのささやかで誤謬に満ちたジバングに関する寓話的記述が、後の世界史に大きな影響を行使するきっかけとなったのならば、私はそこに歴史の皮肉を見ずにはいられない。

注

- (1) 代表的な翻訳を記す。
愛宕松男訳注、『完訳 東方見聞録』、平凡社（平凡社ライブラリー）、2000年
〔東洋文庫版、1971年に基づく再版〕。
青木富太郎訳、『マルコ・ポーロ東方見聞録』、社会思想社、1969年。
青木一夫訳、『マルコ・ポーロ東方見聞録』、校倉書房、1960年。
- (2) 写本によってタイトルは異なる。この論文では引用の際の典拠としたバデルのエディションでのタイトル（BADEL (Pierre-Yves), éd. et trad., *Marco Polo. La Description du monde*, Paris, Livre de Poche, 1998)に従った。
- (3) MÉNARD (Philippe), dir., *Marco Polo. Le Devisement du monde*, Genève, Droz, 2001-.
- (4) BADEL, *op. cit.*
- (5) BADEL, *ibid.*, p. 378-389.
- (6) Voir *ibid.*, p. 50. 「学識高く、生まれもよいベネチア市民、マルコ・ポーロは、自身でこれら物事（訳者注：世界の驚異）を見たゆえに、語るのです。彼が見ていない物事もこの本には書かれておりますが、それらは誓って信頼できる方からポーロ氏が聞いた話となっております。それに私たちは、私たちの本が正しく真実でいささかの嘘も含まれないように、見たことは見たままに、聞いたことは聞いたままにお伝えするつもりです」（訳は筆者による。以下同）。
- (7) *Ibid.*, p. 388: [...] pour ce que trop sont lieux desvoiables et pour ce aussi que le dit messire Marc n'y fut pas 「これらの土地は非常に遠くにあり、マルコ氏はそこに居ておりません」。
- (8) 愛宕松男訳注、前掲書、187-188頁。
- (9) 愛宕、同書、188頁。
- (10) 宮崎正勝、『ジバング伝説』（中央公論新社、2000年）、138頁。同書第四章

(119-176頁)では、当時のイスラム世界における「ワクワク伝説」の形成の背景について解説されている。

(11) 愛宕、前掲書、189頁。

(12) L'em i trove par verité / De ces gemmes a grant pleint / Riches pieres et merveilluses, / Suz ciel n'ad plus preciuses — / Esmeraudes de grant vertu, / Jaspis provez et bien conu, / E[s]charbucles de grant clarté, / Topaces dunt avum (a) plenté, / Grisolites tut enement, / Onicles, bericles (mult) largement, / Amatistes et les sardines / E mil autres gemmes [tres] fines. (*La Lettre du prêtre Jean*, v. 232-244, éd. HILKA (Alfons), « Die anglo-normannische Versversion des *Briefes des Presbyters Johannes* », *ZFSL*, t.28(1915), p.102). (我が王国に) これから挙げるような宝石の数々が大量にあることは本当です。地上にこれ以上価値のあるものは存在しないほど立派で驚くべき宝石であります。価値の高いエメラルド、その名が知れ渡っている本物の碧玉、輝きまばゆいザクロ石、トパーズを我々は大量に持っています。純粋な貴橄欖(かんらん)石に、大量のめのうに緑柱石、紫水晶に赤緋めのう、その他に無数の上質の宝石も。

(13) Et sachiez que il menguent de toutes chars et vous dy que il menguent char d'omme moult volentiers puis que il ne soit mort [de sa mort] ; si que ceux qui sont occiz, il les vont cerchant et mengant moult volentiers, car il l'ont pour bonne char. (BADEL, *op. cit.*, p.366-368). そしてお知りおきいただきたいことは、この地方 [=現在の福建省付近] の住民はあらゆる肉を食べるといこと、そしてとりわけ人間の肉を好んで食べるのです。それも自然死ではない死に方をした人間の肉を。殺された者がいると、彼らはたいそう喜んでその屍肉を求め食べます。というのも人間の屍肉を彼らは非常に上質の肉であるとみなしているからでございます。

Demourant le dit messire Marc Pol en ceste ile pour le mauvaiz temps .v. moys, si descendirent des nefz a terre et firent chasteaux de fust et forteresces la ou il demouroient, pour doubtance de ces homms bestiaux qui menguent les hommes. (*Ibid.*, p.398). 悪天候のためこの島 [=スマトラ島] にマルコ・ポーロ氏が滞在した五ヶ月の間に、船の乗員たちは地面に降りると、彼らが滞在するところに木の城塞と要塞を築きました。獣のような島の食人種を恐れたからです。

Et quant il est mort, si le font cuire et s'assemblent tous les parens au mort et le menguent. (*Ibid.*, p.400). (ダグロイアン島では) 死人が出ると、人々は死人を料理し、すべての親戚が集まってきて、その屍肉料理を食べます。

Et si vous dy que tous les hommes de ceste isle de Angamanam ont chief comme de chiens et dens et yeulx aussi, [...] et sont moult crueulx gens, car il menguent tous ceulx que il puent prendre, maiz que il ne soient de leurs gens. (*Ibid.*, p.404). ここでお話する

のは、このアンガナン島の人間は犬のような頭を持っていて、その歯も目も犬そっくりであるということです。[...]この島の住民で興味深いことは、彼らは捕まえた人間をすべて、それが同種族人でない限り、食べてしまうことです。

- (14) BRUNETTO LATINI, *Trésor*, éd. PAUPHILET (Albert), in *Jeux et Sapience du Moyen Âge*, Paris, Gallimard, 1951, p.767-768.
- (15) マンデヴィル／福井秀加, 和田章監訳；大手前女子大学英文学研究会 [訳]、『マンデヴィルの旅』（東京、英宝社、1997年）。
- (16) BADEL, *op. cit.*, chap.LVIII, chap.CXV, CXVI.
- (17) ROUX (Jean-Paul), *Les Explorateurs au Moyen Âge*, Paris, Fayard, 1985, p. 25
- (18) BADEL, *op.cit.*, p. 17.
- (19) ラス・カサス／染田秀藤訳、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』（東京、岩波書店、1976年）[原著：LAS CASAS (Bartolome de), *Brevisima relacion de la destruccion de las Indias*, 1552]。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第6号(2005年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html